



News Letter No. 22

今回は2024年10月20日(日)に行われた第60回一般社団法人日本顎関節学会学術講演会について、北海道医療大学歯学部 口腔構造・機能発育学系歯科矯正学分野の中尾友也先生に報告させていただきます。

第60回一般社団法人日本顎関節学会学術講演会報告

「顎関節症の検査，診断と治療の現在 -若手部会はこう考える-」

2024年10月20日(日) zoom形式開催

講演に先立ち、小見山 道理事長、ならびに村岡 渡学術委員会委員長から挨拶があった。

講演1：「顎関節症の臨床検査と診断」

村岡 渡 先生（川崎市立井田病院歯科口腔外科）

顎関節症の診断基準や指針に基づき、病態、診察、および基本治療について講演が行われた。まず、顎関節症の概念、病態分類、診断基準について説明され、新しい診察表と診断基準を用いた診断プロセスが解説された。さらに、具体的な症例を通じて、咀嚼筋痛障害、顎関節痛障害、関節円板障害、変形性顎関節症の診断と治療法が詳述された。また、初期治療の原則や保存的療法の重要性、過剰治療の問題点、そして医療倫理の重要性についても言及された。

本講演は、顎関節症に関する最新の診断基準と治療指針に基づき、非常に体系的かつ実践的な内容であった。特に、診察表と診断基準を活用した具体的な診断プロセスの解説は、日常臨床に直結する有益な知見であった。

**一般社団法人日本顎関節学会
第60回学術講演会
顎関節症の臨床検査と診断**

川崎市立井田病院歯科口腔外科
村岡 渡

2024年10月20日(日) WEB



講演 2 : 「顎関節疾患の画像診断」

松本 邦史 先生 (日本大学歯学部歯科放射線学講座)

顎関節症の画像診断についての講演が行われた。まず、パノラマ X 線検査、CT、MRI などの各検査法の特徴や利点を紹介し、顎関節疾患の画像検査の概論が説明された。次に、2019 年の顎関節症診断基準に基づいた画像診断基準について詳しく解説され、関節円板障害と変形性顎関節症の確定診断に必要な所見が示された。さらに、さまざまな顎関節疾患の症例を通して、画像所見から疾患を診断する実践的な方法が示された。最後に、顎関節疾患以外の他の疾患を鑑別するための画像検査の選択方法についても言及された。

本講演は、顎関節疾患の画像診断の重要性と実践的な活用方法について深く理解できる内容であった。パノラマ X 線検査、CT、MRI といった各検査法の特徴や利点の比較は、適切な検査選択の指針となり、診断の精度向上に直結する重要なポイントであると感じた。



講演 3 : 「咀嚼筋痛障害、顎関節痛障害治療の実際とそのエビデンス」

白田 頌 先生 (慶應義塾大学医学部 歯科・口腔外科学教室)

顎関節症の診断と治療について詳しく説明され、特に咀嚼筋痛障害と顎関節痛障害に焦点を当てて解説された。咀嚼筋痛障害は、筋肉の痛みと機能障害を主症状とし、筋筋膜痛が主な病態とされる。一方、顎関節痛障害は、顎関節の痛みと機能障害が特徴であり、関節円板や靭帯、関節包の損傷が原因となる。診断は病歴の聴取と誘発テストを用いて行われ、治療には疾患教育、理学療法、薬物療法、アプライアンス療法などが選択される。また、顎関節症が引き起こす頭痛にも言及され、顎関節症の治療が頭痛の改善に有効である可能性が示された。

本講演では、診断から治療までの流れが系統立てて整理されており、臨床における判断力向上に役立つ内容であった。また、患者の QOL 向上につながる治療を実践するための有益な知識を得られる貴重な機会となった。



講演 4 : 「顎関節円板障害治療の実際とそのエビデンス」

高原 楠旻 先生 (東京科学大学大学院医歯学総合研究科顎顔面外科学分野)

顎関節症の病態、診断、治療について包括的に説明され、特に関節円板障害に焦点を当てた内容であった。顎関節症の診断には、DC/TMD に準拠した診断基準が用いられ、これに基づいて関節円板障害の種類が特定される。治療は障害の種類に応じて初期治療から専門的治療まで段階的に進められる。復位性前方転位には、円板整位運動療法や消炎鎮痛薬の投与が初期治療として推奨され、非復位性前方転位のロックに対しては、ロック解除を目的として徒手顎関節授動術が行われる。さらに、慢性のロックには開口訓練が有効とされる。専門的治療としては、上関節腔洗浄療法やパンピングマニピュレーションなどが行われる。症例を通じて、早期介入と適切な治療選択の重要性が強調された内容であった。

本講演を通じ、適切な治療を選択するためには、診断精度と治療戦略の両方が不可欠であることを改めて実感した。今後の臨床において、患者一人ひとりに最適な治療法を提供するための有益な知識を得ることができたと感じる。



講演 5 : 「変形性顎関節症の診断および治療について」

高岡 亮太 先生 (大阪大学大学院歯学研究科クラウンブリッジ補綴学・顎口腔機能学講座)

この講演では、変形性顎関節症の症状、画像診断基準、基本治療、専門治療、そして咬合治療の選択肢が順を追って解説された。変形性顎関節症の主な症状は顎関節部の痛みと開口障害であり、関節雑音は治療対象ではないことに注意が必要である。診断には画像検査が有効で、特に変形性顎関節症に特徴的な骨変化を確認することが重要である。治療は基本治療から開始し、3 か月経過しても改善が認められない場合には専門治療に移行する。咬合治療は患者の希望と状態に応じて、可撤式装置、固定式装置、咬合調整、矯正治療、外科矯正手術などの選択肢から選ばれる。いずれの治療法も、患者への十分な説明と同意が重要視される。

本講演を通じて、変形性顎関節症の診断と治療の流れが明確となり、大変有益な内容であった。

(一社) 日本顎関節学会第60回学術講演会顎関節学会

変形性顎関節症の診断および治療について



高岡 亮太

大阪大学大学院歯学研究科 クラウンブリッジ補綴学・顎口腔機能学講座